

「尊公の法力を以って碧天を示現せしめ給え。ゆめゆめ違えまいぞ。」

（あのね、この際だから神様仏様にもお願いしようと思うの。神様の方はね、神さんにオファーしといたからいいけど、あなた多少御経とか読めるんでしょ。そこんどこでひとつ仏様の方、よ・ろ・し・く。あなたも晴れた方がいいでしょう～！）

「あー、其の様な事を仰られても、拙僧はしがない髪もない学僧です。御無体な……」  
う～っと息を詰めるような心地で目が覚めた。あー、またあの夢を見てしまったのだ。

昼はまだ見ぬ日蝕に胸を躍らせ、夜は夢に息を詰まらせ待つ事、幾日月。遂に訪れた旅立つその日、自動車道は土砂降りならぬゲリラ豪雨。「なんの前の日和はこれぐらいが丁度良い……」と隣のシートのS見女史。ならばと洗車気分で潜り抜ける。案の定か、雨の上がった薩摩の港、憧れの種子島航路の波路は如何んと案ずれば、なんと波の上行くロケット船！善哉、善哉、「四海波平らかに～」と良い気分で種のヶ島に上陸するや、吉兆かな西方浄土も斯く有りやの清らかな夕陽を望む。協会の善男善女、破顔微笑。まだ来ぬ明日を雲間に願う。

バスは行く、バスは行く。サトウキビ畑は窓の外。ざわわ、ざわわは胸の内。などと思いながらウトウトしている間に「グリーンホテルさかえ」に到着。ついに協会は種子島に橋頭保を設える。バスの荷室から次々に現れ来る機材の山、扉から出で来る遠征隊員の人、人。ここは梁山泊か赤壁か……いやが上にも士気は高まる、の様相。

この日の晚餐は盛会、盛会。自己紹介に漂う期待、希望、願望、熱望。祈願、誓願、懇願、哀願。愛飲、沈飲、痛飲、鯨飲。ラブ愛眼で日蝕眼鏡手作り工房も出現。さかえのロビーは夜の帳をよそに盛り上がって行った。

明けて平成二十一年文月二十二日、いよいよその時を迎える一行の頭上は、雲雲雲&小雨。「我に七難八苦を与え給え」と振り仰ぐ天に光り無し。「南無三、儘よ」と馬手に金こしらえの三脚、弓手に鍛えし伝家のカメラ。むんずと掴み、踏み出すその背中。「見事、本懐を……」と宿屋さかえの女将、「承知、心得た。参ろうぞ、参ろうぞ。」一路バスは「雲居にまがう沖つ白波」の門倉岬へ向かうのであった。

時は来たり、そして過ぎた。生まれた時が悪いのか、それとも俺が悪いのか 天地茂じゃないけれど苦み走って俯く鏡圓坊。足元の草を一蹴り、やおら顔を上げ「いやー暗くなりましたねえ！あれ程とは……皆既ですよ。皆既！……ねっ」

皆が一時、五感冴え、奇しき天然の営為に共に浸れた。何よりの遠征であったと思う。八咫鳥には出会えなかったが、其の三本の脚が表す「天」、「地」、「人」は門倉岬にその心を映していた。そうして何よりも「天」、「地」が育み「人」養った安納芋を賞味出来たのは幸いであった。

ここで一句。

あめつちの 奇しきは等し 芋食らう

合掌